



Title	本特集について
Author(s)	宇野田, 尚哉
Citation	グローバル日本研究クラスター報告書. 2019, 2, p. 37-40
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/72087
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【特集 2】

日本研究英文論考集

Japanese Studies Research Papers in English

本特集について

宇野田 尚哉

1

本報告書のなかすでに繰り返し言及しているように、大阪大学大学院文学研究科は、2017年度から、同研究科が実施部局となるかたちで、大阪大学全体に対し、大学院等高度副プログラム「グローバル・ジャパン・スタディーズ」を開講している。2018年度は、同プログラムの最初の修了者がいる年度でもあり、同プログラムのさらなる展開を期して、国際シンポジウムと Graduate Conference を開催した。

その際に連携のパートナーとしたのは、こちらもすでに本報告書のなかで繰り返し言及してきている、「国際日本研究」コンソーシアムである。具体的には、大阪大学大学院文学研究科と「国際日本研究」コンソーシアムが共催するかたちで、2018年12月2日には国際シンポジウムを、3日にはGraduate Conferenceを、ともに大阪大学の中之島センターで開催した。まずは、この2日間の行事を「コンソーシアム事業」として採択してくださった「国際日本研究」コンソーシアムにお礼を申し上げたい。詳しくは後述するが、さらに12月5日には、国際シンポジウムの基調講演者としてお招きしたテッサ・モーリス-ズスキ氏を大阪大学豊中キャンパスに迎え、「グローバル・ジャパン・スタディーズ」独自の若手研究者ワークショップを開催した。以下、順を追って説明するが、この特集2は、12月3日・5日に研究報告を行った大学院生からの投稿に基づいて構成されたものである。

2

12月2日の国際シンポジウムは、テッサ・モーリス-ズスキ氏（オーストラリア国立大学名誉教授）を基調講演者として、また、申寅燮氏（建国大学校教授）とカール・チュア氏（アテネオ・デ・マニラ大学助教授）をパネル・セッションのパネリストとして迎え、大阪大学大学院文学研究科からは宇野田が、「国際日本研究」コンソーシアムからは坪井秀人氏（国際日

本文化研究センター教授)と河野至恩氏(上智大学准教授)が登壇するかたちで、開催された。そのテーマと構成は、次の通りである。

大阪大学大学院文学研究科・「国際日本研究」コンソーシアム 共催
国際シンポジウム
Reimagining Japanese Studies from Asia-Pacific Perspectives
(日本研究再考：アジア・太平洋の視点から)

第1部 基調講演 The Shifting Frontiers of Japanese Studies

テッサ・モーリス-スズキ(オーストラリア国立大学名誉教授)

ディスカッサント：坪井秀人(国際日本文化研究センター教授)

第2部 パネル・セッション

How to Practice “Global Japanese Studies”(「国際日本研究」をどう実践するか?)

発言① 宇野田尚哉(本研究科教授)

「日本の日本研究は誰と対話することを望むのか？」

発言② 申寅燮(建国大学校教授)

「モビリティから読む日本文学」

発言③ カール・チュア(アテネオ・デ・マニラ大学助教授)

Re-defining Japanese Studies in Southeast Asia

ディスカッサント：河野至恩(上智大学准教授)

総合討論

この国際シンポジウムの成果については別のかたちでまとめることを計画しているのでここでは詳しくは立ち入らないが、つねにアメリカとの関係(いわば東西の軸)で考えてしまいがちな日本研究について、オーストラリアやフィリピンとの関係(いわば南北の軸)を中心に据えて考え方直す機会を持てたことは、貴重であった。また、日本文学の研究から出発しつつも日本研究の枠を超えて「モビリティ人文学」という大きな国際的プロジェクトを展開しておられる申寅燮氏の報告は、グローバル化時代の人文学のあり方を考えるうえできわめて示唆的であるとともに、Global Japanese Studies(国際日本研究)が今後どこに向かおうとしているのかを問うものであったともいえよう。

ソーシアム校の大学院生を対象として発表者を募集し、送られてきた発表要旨を査読して6人の発表者を選抜するというかたちで、この graduate conference を準備した。発表者が緊張せずにすむよう、全体で二十数人のセミ・クローズドの会議とし、使用言語は英語、1人あたりの発表時間・討論時間は各15分、という設定で行った。

運営には、「グローバル・ジャパン・スタディーズ」プログラムのスタッフ（宇野田のほか、山本嘉孝講師、ヤスコ・ハッサル・コバヤシ助教、周雨霏特任助教）があたるとともに、コンソーシアム校からビヨーン＝オーレ・カム氏（京都大学講師）に加わっていただき、前日の国際シンポジウムの基調講演者であるテッサ・モーリス-スズキ氏から講評を賜った。このgraduate conference の構成と発表テーマ、発表者は次の通りである。

Lerner Beliefs of Participations in a Bi-national Tandem Program

Benjamin Phillip Larson (東京外国語大学大学院)

Political Polarization on Japanese Twitter: Estimating Ideology with Bayesian Ideal Points Estimation

呂澤宇/Lye Zeyu (東北大学大学院)

Japanese Literature as World Literature: Tracing Hōjoki's global reception in Meiji era

Gouranga Charan Pradhan (総合研究大学院大学)

Tabunka Kyosei and Religious Minority: Muslim Prayer Space Installation in Sendai City

Andi Holik Ramdani (東北大学大学院)

The Possibility and Impossibility of Narrating about Marginalized Masculinities : Futoshi Miyagi's Project

田村美由紀/Tamura Miki (総合研究大学院大学)

Kyoto School vs. British Commonwealth: Historian Shigetaka Suzuki and "Philosophy of World History"

吉川弘晃/ Yoshikawa Hiroaki (総合研究大学院大学)

これらの報告に対しては、テッサ・モーリス-スズキ氏をはじめとする参会者より、発表の技術から研究の内容までにわたる、建設的なコメントが寄せられた。本格的な国際学会で研究発表を行う前段階の訓練として設定した graduate conference であり、そのような訓練としての機能は十分に果たすことができたと考える。

12月5日には、会場を大阪大学豊中キャンパスに移して、「グローバル・ジャパン・スタディーズ」独自の若手研究者ワークショップを開催した。このときもテッサ・モーリス-スズキ氏においてて、大学院生の研究発表に対する講評を賜るとともに、ワークショップの後半では、大学院生がテッサ・モーリス-スズキ氏と打ち解けた雰囲気で対話できる機会を設けた。この日のワークショップの構成と内容は次の通りである。

第1部 若手研究者ワークショップ

Women's Lives as Thought and Practice of Democracy

Chiara Comastri (オックスフォード大学大学院)

A Japanese Proletarian Mystery in New York

Richard William Leckie (大阪大学大学院)

The Changing Faces of Dazai Osamu's Ai to Bi ni tuite

Jake Odagiri (大阪大学大学院)

コメント Tessa Morris-Suzuki (オーストラリア国立大学名誉教授)

第2部 In Conversation with Tessa (テッサ・モーリス-スズキ先生との対話)

司会 Yasuko Hassal Kobayashi (大阪大学)

12月3日のイベントではコンソーシアム校からの応募者を優先したので、この5日のイベントでは大阪大学の発表希望者等に機会を与えるとともに、英語圏における日本研究のleading scholar の一人であるテッサ・モーリス-スズキ氏と打ち解けて対話できる機会を準備した。

5

本特集は、12月3日・5日に研究発表を行った大学院生からの投稿に基づく。研究発表を行った大学院生の約半数から投稿があり、「グローバル・ジャパン・スタディーズ」プログラムのスタッフで査読にあたり、4本の論文を掲載することとした。当該分野の専門家が査読にあたったわけではないので、不十分な部分が残っていることは免れ難いが、「国際日本研究」コンソーシアムの財政的支援とテッサ・モーリス-スズキ氏のご協力のもと二日間にわたって開催した大学院生を対象とするイベントの成果をかたちとして残すことを重視し、第1集に続きこの第2集でも特集2として英文論考を収めることとした。